島から
地球の未来を
考える

《地球研･列島プロジェクト･セミナー》

いま聞きたい 語りたい!!
人も自然も元気な奄美の秘密

「地球研」とは…

地球研は、正式名称を総合地球環境学研究所といって、京都･上賀茂にある国際的な研究機関（独立行政法人）です。千里（大阪府）の国立民族学博物館、佐倉（千葉県）の国立歴史民俗博物館などとともに、人間文化研究機構に属しています。地球研では、地球環境問題が、自然科学だけでは克服できない問題であり、むしろ人類の文化そのものの問題だという立場から、文科系と理科系を融合させた総合的なプロジェクト研究を多数おこなっています。
（くわしくはhttp://www.chikyu.ac.jp/index.htmlをごらんください。）

「列島プロ」とは…

列島プロ「日本列島における人間ー自然相互関係の歴史的･文化的検討」は、地球研のプロジェクト研究のひとつで、生態学者である湯本貴和･地球研教授をリーダーとする100人以上の歴史学･経済学･生物学など様々な分野の研究者の集団です。古くから活発な人間活動の影響を受けているにもかかわらず、日本列島の自然は世界的にみても豊かな生物多様性をはぐくみ続けています。その秘密をさぐり、未来の世代に持続できる生活を見つけることを目標として、北海道から奄美･沖縄までの地域を対象として、日本列島に人間が生活をしだしてから人間と自然がどのような関係をもち続けてきたのを十分な証拠にもとづいて明らかにしようとしています。
（くわしくはhttp://www.chikyu.ac.jp/retto/index.htmをごらんください。）

2009年9月4日　於　大和村公民館

開催の趣旨

環境問題を理科系の方法だけでなく、人類の文化そのものが生み出した問題として解決をはかる地球研（総合地球環境学研究所・京都市）では列島プロジェクトで、日本列島の人と自然のかかわりの歴史を研究しています。その中の奄美・沖縄班が、島で勉強させていただいたことを、島のみなさんと共有して、より島が輝く未来へ向けてのヒントを得たいという願いから、このたび、地域のみなさんへの感謝をこめて交流会を開くことにしました。

主催：　総合地球環境学研究所・列島プロジェクト
後援：　大和村・大和村教育委員会（予定）
協力：　大和村のみなさん、奄美市根瀬部集落のみなさん

奄美大島は、西表島や沖縄島北部「やんばる」の森にもまさる、豊かな生物多様性をもっています。その森と川と海は、島人の生活を支える場であったとともに、立ち入ってはならない聖域をも含んでいました。奄美大島の自然とそれを利 用してきた島人の知恵は、自然の恵みに感謝しつつ資源を枯渇させることのないように利用してきた、地域住民の生き方の多様性と 豊かさの反映であったと言えるのではないでしょうか。

戦争中に米軍機が撮影した非常に詳しい空中写真を手がかりに、島の暮らしを語って下さった地元のみなさんから教えていただいたことが、どれほど大切な未来へのメッセージとなっているのか、そのことを、もういちど学んでみたいと思います。奄美のすばらしい自然と文化を未来の世代に手渡し、世界に発信していくために、地域のみなさん、ともに集い、学びあい、交流しましょう。

江戸時代以来の薩摩藩の砂糖生産の政策にほんろうされた結果としてのソテツ食ではあったが、奄美の島びとは知恵を注ぎ工夫をこらし「ソテツ文化」をつくりあげたのだ。

（記　安渓貴子/山口大学）

第二部　島の過去・現在・未来をかたる座談会

〔話題提供〕

1、「軍と島社会－沖縄の事例から」 — 陳泌秀（韓国・ソウル大学）

山は誰のものだったのか。誰のものであるべきか。

沖縄の山は戦前までは共有地として島人（シマンチュ）によって管理されてきました。戦後、米軍によって接収され、基地をはじめとする軍用地になりました。沖縄の金武区軍用地料裁判と村落文化の伝統と変化を研究してきた立場から、巨額の軍用地料や跡地開発による経済利益に満足せずに、自然豊かな山を住民の手に取り戻す道を考えたいと思います。

2、「オカヤドカリの不思議－アマンとアマミキヨ」 — 当山昌直（沖縄県文化振興会）

オカヤドカリ類は、琉球列島に広く分布し、各地において「アマム」「アマン」などと呼ばれている。奄美ではアマンが多いのだが、この動物は、針突、神話などにも登場する不思議な存在なのである。ところで、奄美から八重山には「アマンユー」を意味する話がある。今回は、オカヤドカリの「アマン」、そして「アマンユー」の関係を、さらに「アマミキヨ」との関連も含めて考えてみたい。

3、「自然と文化をどう若い世代に引き継ぐのか」 — 盛口満（沖縄大学）

かつて、琉球列島の島々には、各地に独自の植物利用など、自然を巧みに使う知恵が受け伝えられていた。ところが、現在、島のこどもたちは、ほとんど自然と切り離された生活を送っている。そんな時代に、あらたにこどもたちと自然とのかかわりを見出すとしたら、どのようなことが考えられるのだろうか？

本書の写真：当山昌直、瀬尾明弘、蛯原一平、1945年の名瀬塩浜町空中写真（米国国立公文書館蔵）

◆◇ プログラム ◇◆

〈司会進行〉 安渓遊地 （山口県立大・奄美沖縄班世話人）

13:30 – あいさつ　湯本貴和（地球研・列島プロジェクトリーダー）

【第一部　地域の伝承の大切さ】（13:40 – 15:00）

13:40 – 14:10
「古い空中写真から読めること」
発表者　早石周平（琉球大）と根瀬部のみなさん

14:10 – 14:40
「海人の知識を地図に書いてみる」
発表者　渡久地健（琉球大）と海人のみなさん

14:40 – 15:00
「ソテツは恩人－沖縄との対比」
発表者　安渓貴子（山口大）と前田芳行さん（手安・芳華園）

（休 憩）

【第二部　島の過去・現在・未来をかたる座談会】（15:10 – 17:00）
全員参加で多彩な発表と参加者からの発言をおりまぜて自由に語り合う

15:10 – 15:35　座談会1
話題提供・陳泌秀（ソウル大）「軍と島社会－沖縄の事例から」

15:35 – 16:00　座談会2
話題提供・当山昌直（沖縄県文化振興会）
「オカヤドカリの不思議　－アマンとアマミキヨ」

16:00 – 17:00　座談会3
話題提供・盛口満（沖縄大）
「自然と文化をどう若い世代に受け継ぐのか」

そして、全員で未来へのヒントを出し合う

◆◇ 発表内容 ◇◆

第一部　地域の伝承の大切さ

➢「古い空中写真から読めること」

奄美の水田は、近世以降、どんどんとキビ畑に変わり、わずかに残った水田も昭和の減反政策で、いまはほとんど姿を消しています。このシマでイネを育てる日々の暮らしは、里、海、森、山とどのようにつながっていたのか、シマのみなさまに教えて頂きたい。

（記　早石周平/琉球大学）

➢「海人の知識を地図に書いてみる」

大和村（国直～大金久）と奄美市・根瀬部での聞き書きをもとに、サンゴ礁地形の呼び名、具体的な場所に授けられた地名、水産生物の分布と漁撈活動について図示し、つぎのような点にふれたい。

（1）サンゴ礁地形語彙は、造礁サンゴが綾なす海中の微細な風景を巧みに表現する漁民たちの豊かな言語世界を示している、（2）根瀬部から大棚に至る海岸で採集した約160の地名には、サンゴ礁地形の地域的な特徴や、人々の場所認識が反映されている、（3）何世代にも及ぶ漁撈経験の蓄積は、生物資源や地形の成り立ちにかんして深い知識、独自の解釈を育んできた。（4）漁撈活動には、その知識（微地形、魚の習性、食物連鎖など）が生かされている。

そして、会場のみなさまからは以下の点などについてコメントをいただき、一緒に考えられる機会にしたいと思います。

（1）サンゴ礁での漁は、生活の糧を得るだけでなく、同時に「海の楽しみ」（惠原義盛『奄美生活誌』、1973）でもあると思われる。参加者のサンゴ礁の海との具体的なかかわり、またサンゴ礁の海に対する思いについてお聞かせください。（2）近年（ここ20年）のサンゴ礁環境の変化とその影響について教えてください。

（記　渡久地健/琉球大学）

➢「ソテツは恩人－沖縄との対比」

沖縄では、ソテツの栽培・加工・料理という「土から口まで」の伝統の知恵が早くに失われた地域が多かったため、食糧難の時に中毒する例が多発し「ソテツ地獄」という言葉が生まれた。奄美では、今日でもソテツは人々にとってのなつかしい食材であり、主食としての大切さを記憶している人も多い。